



今月の江戸しぐさ「夜明けの行灯（あんどん）」

平成26年2月

行灯は夜の重要な照明器具でしたが、夜明けになれば必要がなくなるので存在すら忘れるものでした。

そのことから今、重要だと思っていることが、時間の経過とともにそうでもなくなってしまうという、例えになっています。

江戸時代、夫婦喧嘩がエスカレートした場合、「夜明けの行灯、今日はここまで」と言って寝てしまい、決定的な対立になるのを避ける知恵がありました。

医療は人と人との関わりの強い職場です。不愉快な事、腹の立つことも時々ありますが、大抵の場合は翌日忘れてしまっています。些細なことを気にするなということも教えています。

「夜明けの行灯」をおまじないにすると、突発する問題や怒り、ストレスを受け流す癖ができます。どうぞご活用を。

※江戸思草は、江戸時代の町民が良いとされること、悪いとされることなどの生活の規範としていたものです。

6歳までに躰とともに習得すべき事とされていました。

判断の基準は粋かどうかだったようです。

他の国にない、一般庶民の高度な精神性が、当時日本に来た外国人に驚きをあたえていたことが多数記録されています。



飴屋



ロバート フレデリック ブラム

Robert Frederick Blum

(1857~1903)

日本をこよなく愛したアメリカ人画家。江戸の風情が強く残っていた明治中期に約2年半訪れ、当時の息づかいさえ感じる作品を残してくれました。